

県北地域の有機農業の取組拡大に向け、弾みがつく

一 有機農業（有機米、有機野菜）の取組に関する検討会を開催 一

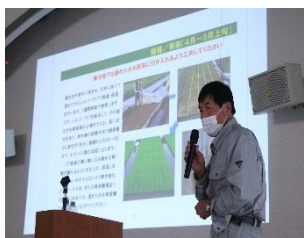
県北地域は、中山間地域であることから「耕作条件不利地域」とも呼ばれるとともに、特に、少子・高齢化や人口減少等を背景に、農業分野でも後継者不足等の課題から農業の衰退、そして、地域の衰退等も懸念されております。加えて、ウクライナ情勢等を背景に、肥料価格の高騰が課題となっており、今、あらためて、資源循環型農業の取組が注目されているところです。

このようなことを踏まえ、現在、県北農林事務所では、農業の振興を図る取組のひとつとして、関係機関と連携して、「有機農業」を推進しているところであり、その一環として、このたび、「県北地域有機農業拠点ほ場技術検討会」を開催しました。

当日は、より具体的に有機農業の取組を理解していただくため、現在、全国的にも話題となっている「学校給食への有機米の提供」の取組事例や、また、身近な取組事例として、「三美地区における有機野菜の取組」を、有機農業を実践している各講師の方に、実際に、苦労したことや、工夫していること等も含め、お話いただき、今後における県北地域の有機農業の取組拡大に弾みがつきました。

一 県北地域有機農業拠点ほ場技術検討会 一

- ◇ 日 時：令和4年12月6日（火）午後1時～
- ◇ 場 所：常陸大宮市 くりえーとセンター、三美地区ほ場
- ◇ 内 容：「省力・低コストの稲作技術」（NPO法人 民間稲作研究所）
「微生物のお世話係の仕事」（株式会社カモスフィールド）
- ◇ 参加者：生産者、関係団体等、約80名



【有機米】NPO法人 民間稲作研究所：館野 廣幸 理事長

「誰でもどこでもできる有機稲作の技術体系」→雑草を抑える稲づくり

⇒まず、「稲刈り直後の秋耕」が大事、稲わらを分解するのは、トラクターではなくて、微生物。（農業では微生物が死滅し、稲わらが分解しない）「1回目の代かき」は、たっぷりの水（水位5cm）で実施することで、土の粒子が層状に沈降し、「トロトロ層」の形成を促す。「2回目の代かき」も水位5cmを維持し、「トロトロ層」により、雑草の種子を下層に沈ませ（光をあてず）発芽を抑制。

【有機野菜】株 カモスフィールド：横山 慎一 農場長

- 農園名の「Kamos」（かもす）は「醸す」に由来→「発酵する」「繁殖する」
- ・「微生物のお世話」→土の中の微生物が快適に暮らせる環境づくり（土を発酵させ、土壌を発酵させ、微生物が増加）【食】微生物が喜ぶエサやり：有機物を畑へ投入
 - 【衣住】太陽熱養生：45度～50度・湿度100% ⇒微生物が元気に活動できる環境へ
 - ・「太陽熱養生」により、微生物が元気になれば、病気や害虫の発生が少なくなる。人間が設計した「肥料」が作物を育てるのではなく、「微生物」が育ててくれる。



【質疑応答】



- 質問：雑草発生を抑制させるために、特に工夫していることは何か？
- 回答：有機物を分解させるための微生物を増やすことが大事。雑草発生を抑制する「トロトロ層」の形成を促すため、「代かき」を2回に分けて実施している。
- 質問：野菜で連作障害を回避させるために、特に工夫していることは何か？
- 回答：「微生物の働き」が悪いと連作障害が起こる。このために、微生物が快適に暮らせる環境づくりを進めることにより、連作障害の回避に努めている。

県北農林事務所では、農業分野における社会的な課題への対応として「環境にやさしい農業」を推進するとともに、農業経営の向上を図るために「付加価値を高めた農産物生産」の取組推進、また、より地域資源の活用を進めるため「資源循環型農業」への転換が、特に必要であると考えております。

このため、今後とも、引き続き、関係機関との連携により、現場における技術支援や、補助事業等を活用した取組支援、研修会等の開催、情報発信等の強化を図り、県北地域における「有機農業の取組」を推進してまいります。